ECOライフに関する情報を募集します。表題に、ECOまたはエコと明記し、メール〈shakai@yomiuri.com〉やファクス(03・3217・8363)でお寄せください。

ECO ライフ

最前線

野の花よみがえるマット

スミレ、キキョウにオミナエシ……。日本に昔からある身近な草花十数種を組み合わせた「マット」でビルの屋上を緑化し、都会に自然を取り戻す。そんな商品を福島県石川町の種苗会社「仲田種苗園」が扱い、静かなブームを呼んでいる。

「多様な草花が咲くところにはチョウやバッタが集まり、それを狙って野鳥が来る。生態系の循環を再現させることが重要なんです」。同社の仲田茂司社長(53)は「野の花マット」の狙いをそう話す。

きっかけは約10年前、地元での水族館建設に際し、「館内に福島の自然を再現してほしい」と依頼されたこと。当時扱っていたのは庭木がほとんどだったため、あぜ道や林で野草の種を採取し、自社農場で栽培。育った草花を段ボールに詰めて水族館に運んだ。その作業の過程で「草花が咲いたマットを作れば、手軽に自然を再現できる」というアイデアが浮かんだ。

自社農園には、もともと少量ながら80種ほどの野草があった。どれも在来種で珍しくはないが、母親が趣味で40年ほど前から種を集めて育てていた。中にはヒメシャガやサクラソウのように野生では貴重になってしまったものもあった。

これらの中から10種類ほど選び、四角いカゴに布と土を敷いて育てた。互いの根が絡み合い、マット状になって「型くずれ」しないため、屋上緑化に使う場合、カゴから出して土の上に置くだけでよかった。

2002年の発売当初の売り上げは低調だった。導入コストが芝による緑化の約10倍と割高なのが難点だった。しかし、四季の草花を楽しめる点が評価され、3年ほど前から売り上げが伸び始めた。東京都内の小学校やオフィスビルなど30か所以上で採用された。約2000平方㍍のマットを屋上と敷地に導入したビルでは、近くの緑地からやってきたのか、コオロギやアマガエルが顔を見せ、クロアゲハやオニヤンマ、ヒヨドリやスズメも飛来するという。

商品展示会で「懐かしい」と言ってマットをじっと眺めている人がいた。「祖先の代から慣れ親しんできた植物には、我々の心を和ませる力があるのでは」。仲田さんはそう話している。

❶野草が植え付けられた「野の花マット」を手にする仲田社長（10日、福島県矢吹町で）＝池谷美帆撮影❷マットを生産する農園にはチョウやトンボが飛び交う❸根が絡み合った「野の花マット」の断面❹カゴに不織布を敷いたプランターに苗を植える従業員

豆ちしき

屋上緑化　屋上の植物が太陽光を遮ることで建物の温度上昇を抑え、都市部のヒートアイランド現象を緩和する効果などが期待される。国土交通省の調査によると、2000～08年の屋上緑化面積の累計は241万7749平方㍍。同期間の都道府県別の屋上緑化面積は東京、神奈川、愛知の順に多く、この3都県で全体の約56％を占めた。

2010.7.19